子供と環境（五）

山下俊郎

五　家庭的環境

（イ）環境としての家庭の意義

子供の成長する環境としての家庭は凡ゆる環境のうち最も大事なものであり、最も根本的なものである。元來環境といふものは子供の成長と共に段々その範圍が擴がつて行くものであるが、子供が幼少であればある程環境と考へられ得るものゝ範圍は狹いのである。だから、特に幼兒にとつては家庭といふものは非常に大事なものとなつて來るのである。この事をもつと詳しく考察して見やう。

子供は母胎内に居るときは言ふまでもなく母親の胎内に居るのであり、母と離るべからざる一體をなしてゐる。この母胎とのつながりは出生によつて一先づ斷たれる。然しそのつながりはまだ〳〵赤ん坊が母乳によつて養はれてゐる間は依然として切れてゐない譯である。だから何と言つても子供の環境としての最も中心をなすものは母親である。がその一方子供は成長とともに段々母以外の人との交渉をも持つ樣になつて來る。父、きようだい、召使、その他の家族は段々子供に對しての力を得て來るのである。殊に子供が離乳して母親とのいはゞ生物學的つながりが斷たれて來ると、母以外の家族との交渉が段々濃厚になつて來る。所が更に子供が大きくなつて來ると家庭外のお友達や近所の人々との交渉が始まる。幼稚園へ行く樣になると幼稚園といふいまゝでにない新しいものが子供の環境の中に入つて來る。學校へ行く樣になると學校が子供の環境に入つて來る。そしてこういふ樣に子供の生活する舞臺が段々廣くなつて行くとそれに伴つてそれ等の舞臺にある色々の道具や人物との交渉が始まつて來る。青年になると友人が家庭の人よりももつと大きな力を持つ樣

になつて來る。このやうにして子供が成長するに從つて、子供と交渉をもち、子供に影響を與へ、子供の心の中に住む世界は段々廣がつて來るのである。

然し、幼兒の間は何と言つても子供の生活する世界は家庭に限られる、少なくとも家庭を中心とする世界に限られる。勿論大きくなつても家庭は凡ての環境の中心ではある。然しその中心としての重さは幼兒期に於て最も重いのである。この大事な家庭的環境の中にどういふやうなものが、どういふ力を持つて含まれてゐるか、わたくし達は先づこれから考へて行く事にしたいと思ふ。

(ロ)家庭的環境の要素

凡そ家庭を形作つてゐるものは凡て家庭的環境の要素である。

先づ第一の要素は子供を中心として考へるときには子供の親である。普通の家庭として親に就いて考へられるべき事はその職業、教育程度、社會的地位、性格、それから親の持つてゐる人生觀、兒童觀、更にかういふ色々の事柄の綜合の結果子供に直接働きかける力としての子供に對する教育の態度等である。次には子供のきようだいの關係である。先づきようだいの有無、そして有るものに就いてはその數、順位、性別、兄弟姉妹の別といふ樣なものが大事な條件として考へられる。

この樣な、親、きようだいの外には祖父母の有無、召使ひの有無、性質等が環境として重要なものであるし、また近隣の一般狀態、友達の如何、それから多少物的條件の加はるものとして住居の如何といふ樣なものが家庭的環境の要素として考へられなければならぬ。

かういつた樣な色々の要素に就いて大事な事柄を次に述べて見やう。

(八)親

子供の環境としての親に就いて考へらるべき事の第一はその職業である。

親の職業から來る影響として、特に幼兒に一番よく觀察される事柄は子供の摸倣による職業活動の外形の影響であら

う。子供の眼にうつる親の活動はすぐそのまゝ子供に摸倣されるからである。例へば學者の子供はお勉强ごつこをするであらう、お醫者の子供は診察の眞似をする事が上手であらう。商賣人の子供は物を賣る事を上手に眞似るであらう。これ等はみな摸倣による職業活動の外形的影響である。

この樣な摸倣による影響は勿論大事である。然し子供への影響力に於てはまだ〳〵外に重大なものがある。それは親の職業は社會的地位を示すものだといふ事である。社會的地位は子供に對して養護の手がどの位伸び得るかといふ事を定める物指しである。それはつまりは家庭の經濟狀態を示す物指しであり、住居の狀態を定める尺度であり、同時にまた親の教育程度の一つの示標になるからである。こういつた樣な色々な條件は子供の上に働く教育力の强さと質とを定めて來る事になるからである。だからわたくし達は、子供の色んな方面の心の働きが親の職業と非常に密接な關係を持つてゐる事を見るのである。

まづ心の智的な働きの方面から見やう。大體今までの心理學的研究によると智的な働きの根本である所の智能は社會の上層階級の子弟が最も優秀であり、下層階級に行く程劣等である。例へば高級官吏、醫師、學者、軍人、實業家と言つた樣な階級の子弟は、多少の例外を除いて總體に眺めると概して一體に智能が優秀である。所が大工、左官といふ樣な職人の子弟、それから更に下つて勞働者の子弟を見ると概して智能が劣つてゐる。今右に述べたのは言はゞ社會的地位の兩極端であるが、この兩極端の間に挾つてゐる中間階級はまたそれ〴〵の社會的地位の上下に應じて智能の優劣の度が正に段階をなしてゐるのである。この樣な子供の智能が社會的地位を示すものとしての親の職業と密接に關係するといふのは、一面には遺傳の影響といふ强い力がある。つまり親のあたま自體にそれ〴〵優劣があるから、それに應じて子供の方にもあたまの優劣がある譯である、然し强ち遺傳の力だけでない事は、同じく劣等なあたまを持つた勞働者階級の子供でも、保育所の保育を受けた子供は、保育を受けない子供に比べると智能の發育が總體に進んでゐるといふ桐原博士の研究によつて證明されてゐる。卽ちそこに環境の影響といふものが明かに現はれてゐるのである。これは結局は經驗が充分與へられてゐるか、そして指導が充分に與へられてゐるかといふ問題に歸着するのであるが、これはあとで總括的に詳しく述べやう。

もう一つの材料として數の觀念、文字の智識が幼兒期の終り、就學の時期までにどの位得られてゐるかといふ事をわた

くしが調べたもので見ると、數の觀念も、文字の智識も上層階級の子供は優れてゐるが下層階級の子供は劣つてゐる。而もそれは上層階級のうちであたまの劣つた子供でもやはり優れてゐるのである。下層階級の中であたまのいくらいゝ子供でも到底中以上の階級の子供ほど智識がない。こういふ事は結局教へられない、教へてくれる人がない、換言すれば親の、そして家庭の教育力が貧弱だからである。そして結局この事も前の智能の事に就いて述べたのと同じ事になる譯である。

このやうに見て來ると概して上層の階級は子供にとつて優れた立派な環境である。然し右に述べた所は智的な方面である。性質、性格の方面になると、中流以上の階級、智識階級にも、下層階級の子供と同じ樣に大きな問題がある。下層階級の問題は後に節を改めて貧困兒童の所で述べるから、こゝで次に上流階級、智識階級の子供に就いて述べやう。（未完）

會告

時局に基き本誌も節約を期し、不取敢本號から一頁の行數を增加して頁數の節減を補ひ、定價はそのまゝと致しました。來年號よりは又適宜の處置を探るべくかとも存じますが、右儀御諒承置き願ひます。

昭和十三年九月

日本幼稚園協會